

# 経済学思考

が身につく

# 100の法則

京都大学経済研究所教授

西村和雄



需要と供給、機会費用、囚人のジレンマ、IS-LM分析…  
ビジネスマンに必須の用語・公式・定理を厳選

600字で学ぶ  
経済学のエッセンス

練習問題  
付き

ei  
OKS

ダイヤモンド社

ダイヤモンド社

---

## 著者

---

西村和雄 (にしむら・かずお)

1946年北海道生まれ。東京大学卒業、ロチェスター大学でPh.D.を取得。

東京都立大学、ニューヨーク州立大学、南カリフォルニア大学を経て、現在は京都大学経済研究所教授。2000年度には、日本経済学会会長を務める。

専攻は経済理論、複雑系経済学の第一人者としても活躍。

著書に『まんがDE入門 経済学』（日本評論社）『入門 経済学ゼミナール』（実務教育出版）『現代経済学入門 ミクロ経済学』（岩波書店）『世界一かんたんな経済学入門 50の経済学人生相談』（講談社）『分数ができない大学生』（共著、東洋経済新報社）など。

---

# けいざいがくしこう みにつく100のほうそく 経済学思考が身につく100の法則

2003年5月29日 第1刷発行

著者／西村和雄

装幀／石澤義裕

DTP／あとらす21

制作・進行／ダイヤモンド・グラフィック社

印刷／勇進印刷

製本／川島製本所

発行所／ダイヤモンド社

〒150-8409 東京都渋谷区神宮前6-12-17

<http://www.diamond.co.jp/>

電話／03-5778-7233（編集） 03-5778-7240（販売）

©2003 Kazuo Nishimura

ISBN 4-478-21043-8

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

# 経済学思考

が身につく

## 100の法則

京都大学経済研究所教授

西村和雄





## はじめに

最近、経済学を専攻する日本人学生が、アメリカの大学院に留学を希望しても、入学許可を得ることが難しくなっている。日本人の教授がいて、過去に数十人の日本人に博士号を出している東部の有力校Yですら、この5年間、日本人は1人も入学を許可されていないとのこと。アメリカの大学の大学院の経済研究科へは、世界中から一校あたり600人から1000人の学生が応募する。一頃の4倍から5倍の数である。中国、東欧からの応募が飛躍的に増えた上に、世界中の国々からの応募も増えているのであろう。そんな中で、日本からの応募数は、4～5人で、数も質も遞減している。昔は、日本からの留学生は期待されてみられていたが、最近では、「十中八九」、たいしたことないと思われている。英語ができなくて、学力も期待できなければ、眼に留まらないのも仕方がない。

経済学以外の分野でも、状況は似たようなものであろう。未来の研究者や大学教授である日本の大学院生の学力が、急速に国際競争力を失いつつあるのだとしたら、それこそ、早く手を打たなければならない。

失われた10年とよく言われるが、何から何まで手詰まりに思われている。経済や社会の問題を、日本では、論理ではなく情緒で議論してしまうからである。実は手はあるのに、気づいていないというべきであろう。

先の日本の大学院生の学力低下も、文科省が、大学院生の数を一機に2倍にすることと大学への入学試験の科目数の削減を大学に強要してきたこと、主要教科の時間数と内容の削減を小中高等学校に画一的に指導し続けたことなどが原因である。このようなことは、小学校から大学院までが何をやる機関で、文科省が何のためにあるかを、行政が理解してさえいたら、起こり得ないことである。

問題の解決には、問題そのものを明確に把握した上で、処方箋を作らな

ければならない。誤った問題把握をするから、解決はおろか、状況が一層悪くなるのである。

かつて文部大臣が、「授業時間が減るほど、子供の学力が向上する」と明言したことがある。これは、一つの例外的な事例をみて、全体がそうであると錯覚したからである。経済学では、ミクロとマクロを区別することを重視し、部分的な結果を全体に当てはめると誤りとなることを「合成の誤謬<sup>ごびょう</sup>」と呼んで、戒めている。

物事には、互いに補完的なものと、代替的なものがある。高校までの社会科と数学は補完的であり、一方が他方の代わりになるものではない。それを代替的とみなすから、過度の少数科目入試や高等学校での際限ない選択性の導入を止められないのだ。さらに、両立し得る二つのものを、まるで相反するかのよう<sup>か</sup>に二律背反で捉えることが、日本では奇妙に好まれてきた。小学校の教育について、「算数より国語」、「英会話より国語」というのもそうである。すべて大切で、現にそうしている国が多いのに、なぜ日本だけどちらかを選ばなければならないのか。「詰め込み」か「ゆとり」かというのも同じである。その二つしかないと思うから、「詰め込み」を否定することが、勉強量をひたすら減らすことだと教育学者までが勘違いをする。実際は、「詰め込むこともあれば、ゆとりもある」、あるいは「効率よくたくさん学んで、ゆとりを楽しむ」方法もあるのにもかかわらず。「学力低下論」などという名称も学力低下を理念と捉える勘違いである。学力が低下しているか否かは、現場が感じ、データで検証される事実である。「学力低下論争」、「学力低下論批判」と名付けて呼ぶ人は、事実<sup>じじつ</sup>に眼を向けていないことになる。

ことは、教育に留まらない。両方やるべき構造改革と景気回復を、二律背反として、構造改革だけをやろうとするから、いつまでたっても景気を回復できない。

経済学は、以上のような社会と経済の問題を解決するために必要な思考

力を養うのに有効な学問である。

本書は、前半を「週刊ダイヤモンド」に、そして後半をやはりダイヤモンド社から出版されている「経 (Kei)」に連載した経済理論のやさしい解説をまとめたものである。今回、単行本とするにあたって、大幅に書き直した。私は以前、やはり「週刊ダイヤモンド」の企画をもとに発展させた本（「世界一かんたんな経済学入門」講談社）で、経済学で人生相談に回答することを試みたことがあるが、本書で養う経済学的思考は、社会問題のみならず、人生のあらゆる問題の解決方法を考えることにも適用できるのである。

単行本の出版に際して、「経」に連載を始めたときからこれまでお世話になってきたダイヤモンド社の笠井一暁、北川哲両氏に、この場を借りてお礼を申し上げたい。

平成15年 4月28日

西村 和雄

## 1章 市場

1 合成の誤謬	16
2 需要と供給	17
3 比較優位	18
4 市場メカニズム	19
5 一物一価の法則	20
6 需要の価格弾力性	21
7 豊作貧乏	22

## 2章 家計と企業の理論

8 限界効用逓減の法則	24
9 ゴッセンの法則	26
10 エンゲルの法則	27
11 顕示選好理論	28
12 補完と代替	30



13 消費者余剰	31
14 限界生産物価値	33
15 平均と限界	34
16 利潤最大化の条件	36
17 機会費用	38
18 包絡線定理	39

### 3章 市場と効率性

19 産業の長期均衡	42
20 バレート最適	43
21 派生需要	44
22 X効率性	45
23 レント	46
24 コンテストابل市場	47
25 差別価格	48
26 収穫逦増	49

27 非価格競争	50
28 フリー・ライダー	51
29 マーケット外部性	52
30 外部効果	53
31 コースの定理	54

## 4章 情報とゲーム

32 逆選択	56
33 モラル・ハザード(道徳的危険)	58
34 囚人のジレンマ	60
35 チェーンストア・パラドックス	62
36 しっぺ返し戦略	63
37 サンクト・ペテルブルグの逆説	65

## 5章 国民所得

38	ミクロとマクロ	70
39	国内総生産	71
40	三面等価の原則	72
41	ストックとフロー	73
42	サービス	74
43	有効需要原理	75

## 6章 消費と貯蓄

44	消費性向と貯蓄性向	78
45	貯蓄のパラドックス	79
46	相対所得仮説	81
47	ライフ・サイクル仮説	82
48	減税の乗数効果	84

## 7章 財政と金融

49 投資	86
50 投資の乗数効果	88
51 中立性命題	89
52 財政	90
53 双子の赤字	91
54 IS曲線	93
55 金融	95
56 ハイパワード・マネー	96
57 貨幣供給量	97
58 債券価格と利子率	98
59 LM曲線	100

## 8章 経済政策

60 流動性のわな	104
-----------	-----

61 財政政策	106
62 投資の限界効率	107
63 フィッシャー方程式	108
64 インフレと流動性のわな	110
65 クラウディング・アウト	112
66 総需要曲線とデフレ	113
67 非自発的失業	115
68 GDPの決定	117

## 9章 インフレとデフレ

69 インフレーション	120
70 オークン法則	121
71 フィリップス曲線	122
72 ハイパー・インフレーション	124
73 日本のインフレ	125
74 不良債権	126

75 インフレのコスト・デフレのコスト	127
76 右上がり神話とBIS規制	128
77 日本のバブル	129
78 バブル崩壊	130
79 特殊法人	131
80 デフレと財政政策	132
81 インフレ・ターゲット	135
82 景気回復策	137

## 10章 国際経済

83 ヘクシャー＝オリーン・モデル	140
84 レオンチェフの逆説	141
85 窮乏化成長	142
86 ブレトン・ウッズ体制	143
87 経常収支の黒字	144
88 為替レート	146

89 Jカーブ効果	147
90 固定相場制下の経済政策	148
91 変動相場制	150
92 変動相場制下の経済政策	152

## 11章 動学と数学

93 ナイフ・エッジ定理	156
94 人的資本	157
95 最適性原理	158
96 バタフライ効果	159
97 複雑系	160
98 大数の法則	161
99 期待値と標準偏差	162
100 偏差値	164

カバーイラスト：古川タク



# 1 章

# 市 場